

ドイツ學界の印象

赤松 要

わたくしは9月初旬に開かれたジュネーヴの國際連合協會の世界連合總會に出席してから13日にフランクフルトにつき、15日にドイツ社會政策學會の大會が催されるバード・ナオハイムという小さな温泉町にきた。フランクフルトから汽車で1時間足らずのところである。保養地だけあってさっぱりとした街で廣い公園と豪華なKurhausがあり、森の小高い丘がつづいている。振當てられた宿についてから、その晩にこの街の一流のホテルで催される學會の前夜祭ともいべき Zwangloses Beisammensein に出席してみた。

まず日本學術會議との交渉に當っていた F. Voigt 教授に面會を求めた。四角な顔のややあお黒い教授が歡聲をあげてわたくしの前に飛んできて固い握手をした。彼はわたくしをすぐ會長の G. Albrecht 教授のところにつれていった。アルブレヒトは長身で柔和な老人である。ところが右手がないので、彼のさし出す左手を握って挨拶した。彼の右手は第一次大戦のとき従軍して失ったとのことだ。彼の言葉は演説のときもはぎれがよく、またよく通る聲で、何となく人をひきつける力をもっている。アルブレヒトは1920年代から30年代にかけて多數の社會問題に関する著書を發表しているが、1947年に「社會政策學會」が再建されてから今日まで會長として適任であったろう。

それから多數の人々に紹介されたが、顔と名とが記憶に残ったのは Walther Hoffmann 教授、R. Stucken 教授、H. Moeller 教授などである。ホフマン教授はその名聲からもっと老教授だろろうと思っていたが、意外に林檎のようなつやをもった顔の人で、一見してまだ若い人だと思えた。しかし、この人がこの次からこの學會の會長に選ばれたということであるから相當の活動家であるだろう。彼の著書はそんなに多くないが、例のイギリス經濟の發展形態論で一躍名聲を馳せたわけである。こん度の大會も彼が準備委員長であり、事務的な才能も相當であるらしい。ストウッケンは Erlangen 大學におり、貨幣論、財政學における長老である。すでに同教授のための記念論文集がフォークト教授の手で發刊されているので、相當の年輩であろう。長身の堂々たる風貌であったからよく印象づけられた。チュービンゲン大學の He-

ro Moeller 教授はあまり風彩のあがらない人であるが、この人はわたくしに會うなり Prof. Ito から財政學の論文集をもらったがその人を知っているかというので、井藤教授はわたしの親しい同僚だ。彼からも宜しくとのことですよとっておいた。フォークトは自分が主として財政學的なことをやっているの、自分のよく知っているストウッケンやメーラーなどにていねいに紹介してくれたから記憶がはっきりしているようだ。わたくしの貿易政策や世界經濟の方面では A. Predöhl 教授にもそのとき確かに挨拶したことは翌日彼を演壇にみたときにわかったのである。Thalheim 教授とは學界の委員會で懇意になった。その他あとでいろいろ思いだが、この學會は出席者名簿も何も準備していないので、誰が出席しているのかわからず困った。あとで學會報告のレジュームも二三を除いては準備されていないことがわかり、日本の學會の方がよりよく準備されていると思った。外國の學會にまで招待を出すならもっと懇切な準備が必要だろうということはフォークト教授に話したことである。

9月16日から18日までの學會の印象は經濟評論(3月號)に書いたからここに省くこととするが、この學會報告で最も注目されたのは何といってもフレデール教授の「世界經濟におけるドイツの立場」と Haberler 教授の「國際貿易における純粹均衡理論」であった。ハーバラーのドイツ語はほとんど理解ができなかった。しかし、この報告については英文のレジュームをもらっていたので、主旨はのみこめたが、報告が終ってからわたくしの傍にいたドイツ人が今の報告はわかったかときくから、いやだめだというと、自分にも皆目理解ができないから無理なことだという挨拶。ウィーン訛のあるドイツ語らしい。

學會の最後の日の午餐にフォークト教授と二三の若い助手たちをホテルに招いて懇談したが、そのときわたくしは1924年にベルリン大學でゾンバルトの講義を聞いたこと、1925年にはミュンヘンのほとりのキム湖畔に福田徳三先生のお供をしてブレンタノを訪問したことなどを話すと、1人の若い助手がそれは私の生れる以前の出来ごとだと驚いた調子で言ったのでわたくしは大笑いしたが、フォークト教授がげげんな顔をして、あなたの年

はいくつだと聞くので、1896年生れだということ、私は1910年だという。これにはわたくしが驚いてフォグト氏の顔を見なおしたのである。今までフォグト氏がわたしより先輩だろうと思って話していたからだ。しかるに彼はわたしより14歳も下で、44歳という若さである。そのときわたくしはフランクフルトで雇ったアルバイト學生にあなたは36歳位でしょうといわれていたことを思いだした。日本人は一般に若くみられる。

學會にはロンドンから大河内一男教授、キールから山本登教授が出席されたが、學會が終ってわたし1人バード・ナホハイムに2日休養した。ゆっくり温泉にでも入るつもりでいたが醫者の証明書なくしては湯には入れないので驚いた。このernstな温泉場はわたくしには全く淋しさそのものであった。

それからミュンスターで再び山本教授と落合い、大學の研究所にフォフマン教授を訪れた。この研究所は独自の組織をもつていず教授と學生との研究の便宜を圖っているものであるが、フォフマン氏の案内でみた學生の圖書室の兩側にならぶ豊富な文獻を壯觀だとおもった。フォフマン氏はなかなか多忙らしく、小一時間ばかり法學部長のJecht教授と話す機会をえた。わたくしはバード・ナホハイムの晩餐會の演説で30年前、ハイデルベルグでStammlerのWirtschaft und Rechtを読み、シュタムラーの方法論をとり入れたと思われるB. HarmsのVolkswirtschaft und Weltwirtschaftに興味をもちだしたのだといったことを話し、今ではドイツ哲學と法學ないし經濟學との関係はどうかと質問したところ、今では昔のように密接な関係はなくなったということであった。

その内に、フォフマン教授がきて大學長に會ってくれというので、たしか植物學者の學長に挨拶し、さらに州政府の大學管理者Kuratorに紹介され、そして公式の大げさな午餐會に招待された。フォフマン教授とはもっと學問的な話をしたいと思っていたが、植物學者の學長とクラートルでは話が大學行政や日本の事情などになった。ただフォフマン氏はわたくしのバード・ナホハイムの演説には感激した。それはいまドイツの經濟學がドイツの思想の流れと切り離されていることを反省させられたからだと言っていた。ミュンスター大學にいるブレデール教授には不在のため會えなかったのは残念であった。

驛まで送ってくれたフォフマン氏に別れて山本氏とハンブルグにゆき、その世界經濟研究所にWinter教授を訪ねた。この研究所のやり方はキール大學の世界經濟研究所と似たものであるが、より多く實際界と連絡しているとのことであった。ハンブルグの夜の街をみた翌

日キールにゆき、そこで研究所を見學した。新聞のアルヒヴはともかく、雜誌論文のカード組織は全く羨望に堪えなかった。一橋大學のアナルスの論文、「經濟研究」の論文はみなカードになっていた。一つの研究テーマについて文獻が網羅的に一括されているから、ここにいれば研究には至便である。この研究所の經費が150萬マルクだそうだから邦貨で約1億3千萬圓位である。

所長のBaade教授は社會黨の議員でもあるので忙がしく、たまたまボンから歸ってきたので挨拶する機会をもった。氏はやはり政治家タイプであるが、學者的な鋭いところもあり、バード・ナホハイムでもブレデールの報告に對して批判に立っていた。わたくしが學會の會員に頒布した日本の國際收支に関する小論文も興味があるからこのアルヒヴに出さないかなど勧めてくれた。Dr. Zottmannが不在で残念だったが、研究所の事務局長から午餐に招待を受けたので、わたくしも局長や二三の若い研究員をホテルの午餐に招待したりした。

その中に日本經濟の研究でドクトル論文をまとめている若いBöttcher君と今1人年長の研究員とがしきりに日本のこと、またわたくしが書いたアナルスの供給乗數や、學會で渡した小論文について質問していた。ベッチャー君から彼の研究要目をもらったが、その中の「名目的並に實質的乗數効果」というところにわたくしの供給乗數をとり入れているのだと語っていた。供給乗數については後に訪問したニュールンベルグ經濟大學の助手たちも興味をもってくれていた。

キールに別れを告げてひとりリューベックからブラウンシュワイグにゆき、そこで舊師のヘーゲル哲學者Glockner教授夫妻と再會の喜びを語り歡待を受けた。それからハンノーヴァにゆき、そこからベルリンに飛んだ。

ベルリンではワーゲマン景氣研究所の後身であるDeutsches Institut für WirtschaftsforschungにKiesewetter教授を訪い、また同氏の親切でオスラム電球の工場と逃亡民收容所を見學した。それから、昔のベルリン大學は東ベルリンにあるので、これに對抗して西ベルリンに建設された「自由大學」の近代式大學をみて、附屬の東歐研究所にThalheim教授を訪ねた。ここでは研究所を見學するよりも氏の構造論について話し、ぼくはいま經濟政策の體系を發展政策、景氣政策、構造政策——これはあなたが初めて使った言葉と思うが——に區分しているといったら、實は自分の講義もそれと同じような體系だと言って、助手に自分の講義要目をタイプさしてくれた。見ると成程似ているなと思った。それであなたの經濟政策の書物が早く出版されることを希望するといったら、研究所の仕事が多忙でなかなか出来ないとい

慨いていた。

それからミュンヘンに飛んで、その IFO 研究所を訪ねた。所長の Wagner 教授が不在で Dr. Werle に会い、ここでは景氣豫測の新しい方法に興味をもたれた。

ミュンヘンからニュールンベルクに行ったが、フォークト教授は旅行中で、その家で助手と會った。フォークト氏の書齋も充實したものである。舊師のグロックナーも戦争で本を焼いたといったが、今では數千冊の立派な書棚をもっていた。やはりドイツの學者には餘裕があるようだ。邦貨で 10 萬圓位の俸給であろうか。

ふるさとに歸った思いでハイデルベルグの舊いホテル Ritter に泊り、「哲學者道」をそぞろ歩いてみた。それからフランクフルトに歸り、大學の Sauer mann 教授を訪ねた。初對面のつもりで握手したらバード・ナオハイムであなたの演説をきいたというので、あのときに見た顔だと思いだした。ドイツの學界は傳統的な歴史的、社會學的な學派と、W. Eucken のオールドの一派とケインズ中心の英米學派との三つの潮流に分かれているということ、わたくしが貨幣論で Knapp の傳統はどうなっているときくと、もうそれはないんだと答えた。方法論では Neumark 教授に會ったらというので、室を訪ねたが不在で残念だった。たまたま經營學の Hax 教授がきたので、話しこみ、平井、山下、古川など日本の學者の話も出た。いまドイツでは學生が經濟學よりも經營學を志望するものが多く、どの大學でも經營學をとり入れようとする傾向があると話していた。

汽車でライン河の岸を下り、この車窓の眺めは世界一ではないかと思ったりした。ボンにとまり、ケルンに行つて學長をしている Wessels 教授に會った。中山學長から依頼の教授交換について話したが、とてもいま正教授で一年も日本に派遣する餘裕はなさそうだとのこと。いずれ文書で交渉しようということで別れた。

まだいろいろ會いたい人もあったが、あきらめて 10 月 10 日にデュッセルドルフからオランダに飛び、ドイツに別れを告げた。ドイツの大學は 11 月の初めから始まるので講義やゼミナールの見學ができなかったことは残念だった。フォークト教授も授業があつたら學生に日本經濟の話をしてもらいたかつたとも言っていた。ドイツの大學教授はみな男か女かの助手をもっていた。ところがイギリスのオックスフォードにハロッド教授を訪い、

ロンドンスクールにミード教授をたずねたとき、2 人の教授ともにガラソとした研究室にひとりであった。

× × × ×

餘白ができたので思いだすままに追記することにした。ベルリンのドイツ經濟研究所にキーゼヴェッター教授を訪ねたとき、前身の景氣研究所長であつた E. Wage mann はどうしたのかと尋ねたら、いま隠退してハンブルグに住んでいるとのことであつた。ワーゲマンはこの研究所の創始者であるから名譽所長というような立場におかれている。街の本屋でワーゲマンの Welt von Morgen. Wer wird Herr der Erde? 1952. というのが出ていたので一本を買った。この書物はまだよく読んでいないが、經濟學の範圍をとり越えたもので、一つの世界觀であり、歴史哲學書でもあるようだ。ワーゲマンはヴィジョンに富んだ學者であり直觀力が鋭どかつた。それでベルリン景氣研究所があれだけの業績をあげたものと思う。

ある印度人の案内で東ベルリンにゆきいまはさびれているが昔ははなやかだつたウンターデンリンデン街をドライブしたときは感慨深かつた。かつてゾンバルトの講義をきいたベルリン大學はあまり罹災していなかつた。この大學教授は平均月俸が 8,000 マルク位だという。東ドイツマルクは西ドイツマルクと 4 對 1 の相場であるから西ドイツの金に換算して 2,000 マルクになる。西ドイツの教授は多くて 1,500 マルク位であるから學者は共產圏の方が優過されていることになる。しかし一般勞働者の待遇は西ドイツの方がよいということを案内の印度人が語っていた。東ベルリンのスターリン街の豪華さとその裏通りの壘々たる廢墟とのコントラストに似た感じである。

タールハイムに會つたとき、ジュネーヴで Röpke 教授を訪ねたかときくので、そうだと答へたら、レプケはドイツの入口にいるからドイツ學界の税關みたやうなもので、是非とも彼を通過してドイツに入らなくてはならないと答へていた。實はレプケ氏を豫告なしに訪ねたがちょうど晚餐後に奥さんと 2 人でくつろいでいたときで、喜多村氏の紹介状をみて舊知のように心よく迎えてくれた。やや老いても美貌の奥さんの出した紅茶をのみ、レプケは私に彼の名著 Die Lehre von der Wirtschaft に署名してくれた。